

『主体的な学び』を実現する道徳科の取組

富良野市立樹海中学校 学級数5(2) (校長 森田 繁)

I はじめに

本校生徒は、善悪の判断が身に付き、互いの個性を理解し尊重し合うことができるが、多様な価値観で捉えたり、自分の思いや考えを相手に適切に表現したりすることを苦手としている。

こうした生徒の実態を踏まえ、本校では『主体的な学び』を実現させるための取組』として、2年前から道徳科に重点をおいて授業改善に取り組んだ。

II 実践の概要

1 全校体制で取り組む実践

(1) 全教職員による授業実践

年度始めに年間指導計画に基づき、学年に所属する全教員を割り振り、道徳科の授業を行った。

全教職員による授業実践のメリット

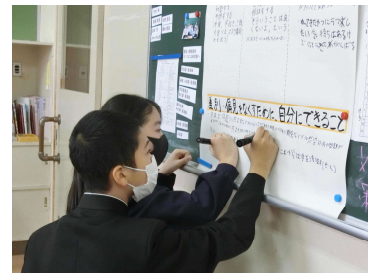
- ・本校が目指す道徳科の目標や学年の重点内容項目が共有できる。
- ・一人一人の生徒を複数の眼で見ることにより深い生徒理解に結び付く。
- ・生徒のよさや変容を的確にかつ客観的に捉えることができる。

(2) 授業展開の統一

授業では、内容項目の理解を基に、題材として扱う教科書の教材研究に努め、生徒が考え、語り合う授業を工夫した。

特に、模造紙や付箋等を活用し、生徒が自分の考えを模造紙に表し、互いの考えを可視化することにより、一人一人の思いや考えを表現・共有するとともに、他者の考えから自分の考えを深めることができた。

模造紙を授業後に教室内に掲示したことにより、生徒は内容を振り返りながら日常生活の中で自分の視野や考えを広げるきっかけにしたり、教師は評価材料として活用したりすることができた。



【模造紙を活用した考えの可視化】

2 道徳科の年間指導計画の充実

道徳科と学校行事や教科等の関連を明確にした「年間指導計画 別業」を拡大印刷し、職員室に掲示したことにより、全教員がカリキュラム・マネジメントの視点をもって、年間指導計画を見直すとともに、教師の日常的な道徳教育の意識を高め、教科等横断的な視点による授業改善に結び付いた。

学年	道徳教育	技術・家庭	特別活動
1年	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)
2年	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)
3年	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)
4年	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)
5年	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)	道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育) 道徳科(道徳教育)

【「別業」を活用したカリキュラム・マネジメント】

3 生徒を励ます評価の工夫

本校では、評価を前後期に分け、前期は、複数の授業において特に成長が見られた授業に焦点を絞り評価し、後期は、大きくくりなまとまりを踏まえ総合的に評価することにより、生徒のよさや可能性、成長を積極的に認める評価を行った。

また、評価方法として、年間35時間の授業における生徒の様子を一覧に記入する「道徳評価チェックリスト」を活用し、授業者以外の教師が授業中の生徒の様子を観察・記入し、生徒が記入したワークシートと併用することで、より多面的・多角的に生徒のよさを評価することができるとともに、複数の教師が、生徒のよさを評価することにより、生徒に自信をもたせるきっかけとなり、実践意欲が高まった。



【「チェックリスト」を活用した評価の工夫】

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 授業形態や評価の工夫を図ることで、生徒は、自分の思いを表現できるようになるとともに、今まで以上に互いに認め合う雰囲気生まれ、自己有用感を高める機会になった。
- 生徒自らが問題意識をもち、よりよく生きるために主体的に考える意識をもつことができたことにより、教員が授業実践の手応えを得て、実践意欲を継続させるとともに、カリキュラム・マネジメントの視点をもった教育活動を推進することができた。
- 今後、「考え、議論する道徳」の一層の充実を図るために、問題解決的な学習や体験的な学習などの質の高い多様な指導方法の工夫を図る必要がある。

小中併置校における9年間を貫く話し合い活動を中心とした道徳科の実践

新得町立富村牛小中学校 学級数6 (校長 新倉 忠司)

I 実践テーマの趣旨

本校では、山村留学による様々な地域から異なる経験をもつ児童生徒が在籍していることや、小中併置の学校体制を生かしながら、道徳科における道徳的諸価値の理解を深める授業を創り上げることを目指し、本校独自の2つの型の導入による「自分の考えを深める展開の工夫」、9年間を見通す児童生徒の変容を系統的に見取る取組を推進している。

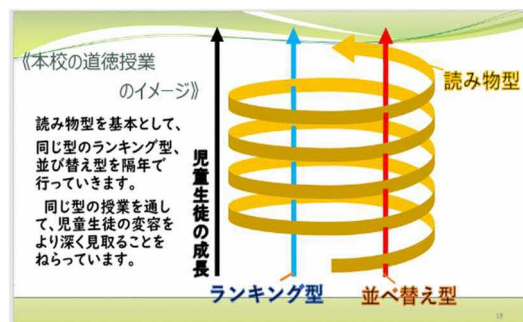
II 研究内容

1 「自己との関わりについて考えを深める展開の工夫」

本校の道徳教育の重点目標は、様々な地域から集まった児童生徒が地域や他者とのつながりを深められるよう「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」及び「友情、信頼」としている。

それら内容項目の価値理解を図るため、本校の道徳科の授業では、2つの型により重点目標に係る内容項目について複数回の授業を実施し、児童生徒の道徳性を育てている。

教科書を用いて、ねらいとする道徳的価値について自己との関わりで考える「読み物型」の授業を行った後、自己の生き方について更に考えを深められるよう、本校独自に位置付けた授業の型である「話し合い型」の授業を実施している。



【本校の道徳授業のイメージ】

「話し合い型①ランキング形式」

教師作成の補助教材（「地域で大切にしたいことランキング」など）を児童生徒の道徳的価値観に基づいて順位付けをしながら考えを深め、互いの考えを交流させることで、多面的・多角的な考えに触れさせることを目的とした授業形式。

「話し合い型②並べ替え形式」

教師作成の補助教材（「本当の友達とそうでない人との並べ替え」など）について、児童生徒の道徳的価値観に基づく基準を考える中で、自己との関わりについて考えを深めるとともに、新たな道徳的価値に気付かせることを目的とした授業形式。

2 「小中併置の学校体制を生かした9年間を見通す児童生徒の変容を系統的に見取る取組」

研究内容について、全教職員で共通認識をもち、発達の段階に応じて適切に内容項目を配置し、9年間を通じて、児童・生徒の道徳性を育成している。

特に、授業における見取りを積み重ねることで、小学校低・中・高学年・中学生と各段階での道徳性の変容を把握しながら、授業で活用した資料や評価をポートフォリオで蓄積することを重視している。

III 成果と課題

- 「読み物型」の授業において、内容項目を自己との関わりで考え、「話し合い型」の授業において、更に深く考えるという授業構成から、児童生徒が主体的に自己の生き方について考えを深めていく様子が見えてきた。
- ワークシートを活用したポートフォリオ評価を行うことで、子どもたちが意欲的に取り組み、継続的に自己の生き方について振り返ることができた。また、教師が児童生徒の「道徳性の高まり」を捉えたり実感したりすることができた。
- ▲ 話し合う場が少ないという現状が見られたことから、「読み物型の授業」と「話し合い型の授業」を分断して指導するのではなく、一単位時間を有機的に結び付けて話し合いの時間を確保するとともに、内容項目の理解から深化へとつなげる指導計画を構想し、学習効果をさらに高めていく必要がある。今年度、「ランキング形式」、「並べ替え形式」の実践を積み重ねられたことから、今後、他の形式の構想について、検討していく必要がある。
- ▲ ポートフォリオ評価から児童生徒の変容を見取るため、各学期及び学年末においても振り返りの場を設けるとともに、児童生徒の学習状況を見取り成長を促す必要がある。

全生徒が「自分の考えを深められる」道徳科の実現を目指して

別海町立上春別中学校 学級数5 (校長 赤木 弘文)

I テーマの趣旨

本校では、2か年に渡り『「考え・議論する」道徳科の在り方』に関して、全生徒が「自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考えられる」よう、道徳教育推進教師及び校内研修担当教諭が連携し、全教職員が主体的に授業の質的転換を図る取組を推進した。

II 実践の概要

1 一単位時間における「タイムマネジメント」の充実

道徳科の授業の4つの段階「導入」「展開前段」「展開後段」「終末」は、どれも大切な学習活動だが、展開前段における、中心的な教材を通して価値を追求する学習活動に多くの時間を割くと、展開後段以降の時間が窮屈になる。

そこで、本校では、ICT 機器でイラストや写真を効果的に提示し、短時間であらすじを確認したり、展開前段と展開後段における発問をできる限り精選したりすることで、各段階の学習活動の時間を十分に保障する取組を推進した。



【交流の様子】

2 「展開前段」と「展開後段」の関わりの充実

(1) 意図的な「指名計画」や「問い返し」の設定

展開後段で、生徒が多面的・多角的に物事を考えられるよう、展開前段までの流れが非常に大切である。

本校では、展開前段で生徒が本時のねらいである「道徳的諸価値」に迫れるよう意図的に問い返したり、展開後段で導入の場面に遡って考えを想起させたり、全体の交流場面で、机間指導に基づいて意図的に指名を行ったりするなど指導方法を工夫した。

(2) 「授業構想メモ」の活用

本校の校内授業研究では、授業者は、「授業構想メモ」を活用し、「本時のねらい」「評価規準」「主な学習活動」に一貫性をもたせるよう、発問や問い返し等を精選することとした。

授業構想メモ		単元名 「25 よりよいクラス活動を目指して」 (『あたらしい道徳1』 東京書籍)
①本時の目標(ねらい) 望まぬ回収活動の問題点について話し合い、集団の一員としての役割と責任の自覚を深め、協力し合って集団生活の向上に努めようとする道徳的実践意欲と態度を育てる。		
		②評価の観点 C(18)よりよい学校生活、集団生活の充実
③評価規準(目指す姿) 自らの所属する集団の目的や意義を理解するとともに、個人力を合わせチームとして取り組んで達成できることなど、集団の在り方について多面的・多角的に考えを深めている。		
授業展開	主な学習活動(▲=支援を要する生徒への手立て)	
1 導入 ○ゴールを提示(4分)	・「家での過ごし方と学校での過ごし方の違いってなんだろう。」 生徒の反応→「家では自由に過ごしてよいが、学校では周りの手を考えて過ごす」 ⑤課題④-⑫⑬ 学校での活動をよりよくするためには、どのようなことが大切だろう	
2 展開前半 ○教科書の内容を讀	⑥手立て(▲=支援を要する生徒への手立て) ・登場人物と物語のあらすじを復習。	

【授業に一貫性を生み出す「授業構想メモ」】

III 成果と課題

- 授業評価「道徳科の授業では、じっくりと自分の考えを深めるだけでなく、他の人の考えに耳を傾ける場面はありましたか。」で平均3.7となり、授業改善に一定の成果を挙げることができた。
- 「展開後段」で、思考を深める場面では、自身の経験等を踏まえつつ、他の生徒の意見に耳を傾け、多面的・多角的に道徳的諸価値について考える場面を多く設定することができた。
- 今後も、タイムマネジメントを徹底し、「発問や問い返し」を工夫する必要がある。